

広島平和体験学習を通して

占冠中2年 渡辺 幸恵

僕たちは、村の代表として、広島に3泊4日行かせていただきました。1日目は、移動で、2日目は厳島神社と平和祈念資料館に行きました。3日目は、平和祈念式典に参加して、その後、被爆者の方のお話を聞きました。

平和祈念資料館で、全身にやけどを負った人の写真がありました。それ以外にも5歳の子の言葉などを見て、本当に苦しうにしている、自分まで原爆のところにいる感じになりました。ものすごく熱くて、川に飛び込んでいる写真があります。飛び込んだせいで、肌が赤色になったり、



青色になったりしています。それは、放射能物質が川にもあり、体に変色してしまうのです。被爆者が書いた絵などもあるのですが、それがものすごくリアルで胸が苦しくなりました。

3日目の式典では、独特な雰囲気を感じました。言葉ではうまく言えませんが、テレビで観た景色と同じはずなのに、その場にしていると緊張が高まる感じがしました。原爆は、絶対に落としてはいけないことを、広島市長や内閣総理大臣の話聞いて思いはさらに強くなりました。

その後、被爆者の方のお話を聞きました。僕が聞いた人は、胎内被爆者の方でした。

寺田さんといえます。寺田さんのお母さんが両目にガラスがささり、両目の視力を失いました。何にも見えない中で、5人の子どもを育てあげました。90歳のころ、寺田さんのお母さんはこう言葉を残しました。「また、再び戦争をするのであれば、私の目を直して、子どもを見ることのできるようになってからしてください」と言いました。そのとき僕は、寺田さんのお母さんは、凄く子ども思いな方だと思いました。寺田さんのお母さんは、平成25年、西暦2013年に95歳で亡くなられました。

原爆の恐ろしさ

トナム学校8年 グルンゴソニカ

皆さんは広島に原爆が落とされたことをご存じでしょうか。1945年8月6日晴れた朝、午前8時15分に広島へ原爆が落とされました。原爆はきのこ雲を作り、広く大きく爆発しました。その

時の人々は、爆発の熱さや爆発後で苦しい思いをして、14万人が亡くなりました。私は、アメリカ人が原爆を落としたことで、「広島の人たちや子どもたちの大切なものをひどくうばった」と思います。寺尾興弘さんの父が中国で戦死し、1年後に手紙が来た。その手紙が来る前は、寺尾さんの家族は、「絶対父さんは帰ってくる」と信じて、ずっと笑顔で待っていた。そこでついに8月6日が来た。女手一つで兄弟3人を育てた母は被爆から23年後、がんのため、57歳で亡くなった。「それを聞いて私はとても悲しかったです。

アメリカのトルーマン少尉が広島に原爆を落として苦しい思いをした子供たちを見て、「後悔している。」と語ったそうです。私は、「落とした後で後悔するならば、落とす前にこんなことになるか」と思っています。平和でいたのにと思います。戦後はもう広島には自然がでないと語っていたけど、今の広島は平和で自然も綺麗です。私も、日本全国に愛されてきたのが今の広島だと思います。

広島平和体験学習で学んだこと

渡辺 幸恵

はじめに、この度広島平和体験学習に引率者として参加させていただきましたこと、この場をお借りし皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

2年前、同じく引率者として体験学習に参加させていただきました。初めて広島に訪れたのは「八月六日の平和記念式典」はテレビ等でしか見たことのない私にとって戦争が引き起こす悲惨さを目にし、この平和な日常の大切さを噛み締めて帰ってまいりました。

平成時代から令和時代になりましたこの元年に体験学習に参加できることに感謝し関山先生をはじめ占冠村の中学2年生5名と共に新たな気持ちで、微力ながらも「平和の尊さ・広島原爆被災者の思い」を繋げることを心に誓いながら行ってまいりました。

私が最も心に残ったことの一つとして、参加しました「証言のつどい」で直接被爆された寺尾興弘さん(77歳)のお話です。

寺尾さんの証言は鈴木さん・ソニカさんと一緒に聞きました。私達が入室して間も

なく寺岡さんが参加者15名の内、男性が2名しかいないことをとても残念そうに話されました。「いつも女性が多く、もっと男性にも語り継いでほしい……。」と。

寺尾さんの自宅は原爆ドームから300メートルの距離にありました。原爆投下直前の7月に爆心地から4・1キロの距離の寺尾さんの父の実家に引っ越し、そこで八月六日を迎えました。「生きて

るのは奇跡だ」と長年思ってきたそうです。寺尾さんの父は戦死、母は女手一つで兄弟3人を育て被爆23年後、がんのため57歳で亡くなりました。寺尾さんは原爆投下直後に自宅のある中心部へ母・兄弟と共にきました。まだ幼い寺尾さんは、同じ子ども・赤ちゃんの悲惨な現状に「母さん、ここで一緒に死のう……。」と母に何度も言ったそうです。生きてしまっていることが罪だと感じてしまったのです。寺尾さんは母に「被爆したことを絶対に言ってはならない。」と亡くなるまでそう言われてきました。

このこともありボランティア語り部をずっと断ってきそうです。メーカー勤務をされていた



寺尾さんは手先が器用なことを生かしステンドグラス作家として「平和を未来へ残す模型」をテーマにステンドグラスで原爆ドーム等を作成し、日本国のみならず世界各国へ作品を展示、平和を広める活動をされています。活動を通して2年前に語り部もしようと思えるようになったそうです。

寺尾さんが幼い頃に体験された「戦争による広島への原爆投下、惨劇、苦しみ、被爆者としての人生」を語り部として「絶対に戦争はあってはならない！子どもたちの未来のために平和でなくてはならない！」と強く感じました。

広島平和体験学習を終えて

関山 直樹

これまで私は、日常生活で戦争と平和について時間をかけて考える機会がほとんどなかった。国外において「紛争」や「内戦」が報道される度に、「戦争が起きない世界になれば」と思うくらいであった。そんな私にとって、今回の広島平和体験学習に引率者として参加するにあたって、「戦争と平和」に対してどう向き合うかについて自分の考えをまとめることを大切にしたいと思った。

1945年8月6日の午前8時15分。広島に原爆が落とされた。実はその日の深夜0時25分に一度空襲警報が鳴らされ、午前2時10分に解除されたことを証言者のつどいで知ることとなる。防空壕にいた人の中で、自宅に戻り、安堵から寝てしまった人もいたようだ。犠牲者が多いことには変わりないが、「そのままいれば生き残った命」があったことも事実であり、初めて知ることとなった。

「災害時には避難する」ことが徹底されるべきはずなのに、建物の疎開作業や防火地帯をつくるために多くの人々が動員された。作業に動員さ

れた人で犠牲になった人数は6300人にのぼる。当時の国民は「避難することに加え、国のために働く考え」も持っていたことを今回の学習で再認識することとなった。広島平和体験学習の中で、私たちは原爆ドームと平和祈念資料館を訪問した。紹介しきれないほどの写真や被爆者が遺した物の数に驚いた。学生の頃一度訪れたことがあったのだが、その時は「ただただ悲惨な現状を見て、言葉に詰まっていただけだった見方」であった。そこから「家庭の背景や被害にあわれた家族がどんな思いをして戦後を過ごしているかという見方」へ変わった。

証言者の集いでは、広島島のYMCA本館を会場にして、参加者は被爆者からの話を聞く機会があった。私は、「今日に至るまで、前を向いて頑張ってきた原動力はどのようなものだったか」として「子どもたちに毎日をどんな風に過ごしてほしいか、何かメッセージがあればお願いします」と発言した。すると、証言者の田所さんは、「頑張ってきた原動力は、母から「亡くなった父に恥ずかしくないような人間になれ」と

いう力強い言葉だった」と答えてくださった。続けて、子どもたちに向けてのメッセージとして、「毎日を楽しく過ごし、命は一つだから大切にしなさい」と言いたい。私は孫や子どもたちに言い聞かせ続けていた」と答えてくださった。

戦争があった事実を決して消えることはない。平和について考える機会がここまで大切なものであることを実感することができた。この学習を通して、私たちにできることは、戦争があった事実を風化させずに、戦没者のことを忘れないでいることだと思っただけだ。思い出さくない事実から目を背けず、あえて目を向けることで、戦争を知らない世代にも戦争について考える機会の大切さを訴えることが必要であると感じた。戦争にかかわった国にも失った命があることを考えると、国外にいる人たちの考え方に触れる必要があることも感じた。「加害者と被害者の両方の立場」で互いに相手の気持ちを考えていけることができれば、「戦争と平和」に対して、しっかりと向き合うことができると思う。